航海日記　地

特別
カ5
6012
2

航海日記　二

705
06012
2

<2015-19>

翌三月廿五日　晴　東北風　未

一　今朝ハ船ハ西に走り此度河幅三四丁斗ニして至て
濁水なり　河の名をポートメニトと云　鉄級を呈国祥理
を食し辰ノ上刻ウブナウビニヤと云処に船附程をとり（地名）是
此処も河岸に至て家の人家有又川中に板橋を架さ
さたら程也と書きて走る事　十里斗にして　船の右り
のうらにてウヒトフチイナニト（地名）と云処ハ左に緑見え京の前にて
しては古え華盛頓（ワシこトこ）大統領隠居せし地と云　右大統領
死去の後ギヤマンにて作りし船の中に置き物知
ふれとも来るに生る人のごとしと云ふギヤマンに船
之中に宮殿に通にてよへと云此処よりワシこトこ府
まて十九里あり走る事十里斗にして河向に庵場あり

下ハ石垣ニて尾を以我國のチりベイのことし庭
場内土地の数ハ五弾年の中列ニ華燈(ワニトトニ)提ホトマカ
チビヤールトボールトト云如ニ呉船ニ而河岸より西ニ向テ三
百兵卒ゲベルを持て二行ニ列し楽を奏し凡負数
千人車ニより騎ニ乗者向を持て同しく二行ニ
引き是百人車 何ぞ懐手ハ其あり 此所ニ車数人
運ひの車ニ数十輌 三公ハ一輌ニ四三人 此車ハ馬四疋
ニて引 三ヶ所ハ引人二人 或ハ四人 乗り左ハ一ヶ引延ニ而
引為各并車毎ニて次第ニ進ミ出ん所ニ騎ニ而数十騎
二程(バタイロニ)(隊伍ニ而)隊数并ニ楽を奏して先ニ進ミ又日本人ニ案
車のまニ充ニ兵卒数十人鞍鐙ニ而又後ニ步兵二程
隊数同しく楽を奏して進ミ行而の男女数

百人車ニ乗り騎し　或ハ車ニ乗り石垣ニ
坐りて見物ニ車止まりてあり茅り冠抔
取り手を振り礼をなすもあり又二三才の小児を抱きて
我か胸の手を採らしむるあり四人歓呼して礼をなせし
或ハ七八才より十七八の女の子なとしたる頭に来て
礼を案ニ愛らしき事ニ又見人来て車の中
に手を入て握んとするあり女の人ハ是ニ手を出
しては礼をなすとの者にし車の跡に追ひて先人
無くなるまての出ハ又其を随ひて礼をなすもあり女ハ官家ハ
多分家の二階三階或ハ四五階の高楼ニ居て白き布
或ハ我か鉾ニ色の旗を振り或ハ茶利理ニ旗を先
左ニ振りて礼をなすもあり凡まても有りて二里斗ニして

振鈴にて之を一諸に八兵卒百人斗ゲベルを持て
固めたり振鈴局の上に日ごとの大旗を建おて
次第に華をなり振鈴局に囲る警衛の士卒ハ二行に
列し楽器を奏して迎へけるおて旅館ハ八階或ハ
七階にして何れも唐石を以造りわしの棟も高く
家ハ三千四五斗ばかりにして其中に酒店或ハ菓種店
其外細工諸品小間物其外ヶ処色々種類其他其品
の店なりて其中ハ其数知るべからず　実に目を驚かし斗
なり夜分ハ一面に瓦斯灯の燈火を照し昼のごとし　人物等
の衣服は羅紗　帽子は黒革等カツブリの類なりと
織物を着たり　男女人物ハ美しく　日本人ヲ
年の胡に羊毛羽織　上陸なり是を見物　新聞紙

せまり同て何れも　百里或百里或ハ千里の外より見物
に来る者の群集せり　其数のとして　尤も
千里外より来る者へとも火輪車に乗して来る時ハ
一日一夜の中に来るなり　我国にて二千里外より往来
し夕刻に到りてまて　振鈴の音を聞て群集し
見物人二階の窓より　百文銭　四文銭の数を投与
ひしに大勢集り来て是を争ひ拾ひて　其国の人
物ハ男女とも色白く　男ハ常に羅紗の筒袖股引
を着用し　冠ハ種々有り婚とき　士官ハ襟に
白き西洋布を巻し　上着ハ黒羅紗にて　肩の所に
金色の金糸を以て作る紐のイボレツトを付　手首の所に
又金糸を以て中三寸斗の筋を縫着て　三角を着上

これら冠にも金玉などを以て中に入るゝ事は少く絶て向額に細
小き金ものなどを以て鍍金を付る類を用ひると常に此礼式
の折りには皆男子甲胄にて戦場に出るを見る様に用ひる之
我が国にては男の紋所を付て婦人におゐても羅紗ものゝ
色織を用ふるに付ても総て結びの紋所ありて礼式に婦
人は冠物を冠りて肩衣様の物を帯ぶる服には額の紐より
垂れたる香水抔を付て用ひ其の上を艶よくし
以て之を見る色の異なる女の子にも用ひて多く蒔絵あり
其品々も皆金にして我邦の雛人形の如く手首に
ハブレースレスット云輪を掛け何れも金或はジヤマニ石
珊瑚等にて飾りし其の品は種々の形を以て飾る
もあるを價凡百ドル位より千ドル或は二百ドルまで有る

此中に親子兄弟の名様を書きて其の金あり又
指輪は男女とも手の是を国にて着用の事に用
ひ其常様は同しく前後に付て手に至る角の物
また其の指にも結び付け男の衣類より是之腰より
下は鎖骨にて我提灯骨のことく小なるポー
プスカレニスと云ふものを付太刀にて裾の処まで
差渡し其大きな及ぶもの是のものを引き付けし途
中を引上ても少し引揚る有りある事一つ結び
其首の処より鎖にて又誇るの所り目付けて其服は
小色をとるの時種々の模様を付けるも帰る家の人
入りて是は結び合はされるは衣類に用ひる事多く
其時の紋を用ひるに之を織出し又は織込みてある

とも用ゆるハきん人もあらん又た食する人ハ箸叉ふあるん
ありのミにて婦人ハ何きも絹布を用ゆるなれども
英国ニハ定まりて支那国より渡来する絹類を
以佛蘭西ニ而出て織なせし所の絹布あり又欧羅
巴亜米利加等ニて製するのくさち夜服を求む其外の
流行ものハ佛蘭西よりあるといふ婦人の服下ニハ控衣
皆のこと一理を用ゆるも四ヶ年以前ニ佛国より流行
もしもさねて近日よりハ悉く英国の料理を
食すといへども前ニ云ふごとくなり服なて是を云ふ
ともに変ハへてハ市中家毎ニ猶子の言葉を
言葉ニ而ハ又ハ凡の者も行りて洋まるニハ控衣を
所用して白金のごとし 実ニ見事ニして目を

を設けあり其入る時服ニハなくして入湯する湯桶ハ幅
弐尺五寸長さ六尺余ニして中ハブレツキニて張合せ
此湯船の上ニ別ニ湯のある口水の口有りて室中自由
ニして風呂ある事半なし 湯場ニハ夫々宅毎の戸
有りて是を〆門より錠をかけ置き人ありて入湯済人
ニ乳をとらんとするなり 下ニハ湯船の際迄より花毛
甎を敷姿見の鏡を其側ニ又白き布ニて棚を造
根ニシヤボン布きん等を並べ其外のもの日本人ハ此
人ニ手乳をとらんとする事ハさらにあらざき 大皆混して
入湯なし是等人とも是をなんして其ひ浴びき
皆遊ありて毎日日本人ハ湯の時ハ必前日東
中々至るまで花毛甎の数を敷なり

ここに仕掛して水をあし　為積を成せし業事
跡し残るもの皆ふて仕掛をば業事に至りては思ふなり
筆舌に難述

同廿六日　晴中

一 朝より市中馬車の往来繁し　又郵も湯に
湯に浴し目よくは夜中とても何時にても入るべし
常にありて子チを思ふ　自由にあるべき電気器
に引きて手を洗ふ所にて右の如く家内の所に湯を
まゐらせ下ふ時は右の蒸気の仕掛にて沸かし知
より出るなり　夜話等を何にても人力をも用
ゐずして湯船の中に清水を入れ蒸気を金中に仕掛を
なして是を動かし手をもて洗ふ事能はぬ垢を落

し又手を洗ふにも仕掛にて大きさ凡そ中の丸
く深き石の中に入れるに石印のごとくに出来りて
水を出し用ひなり　又朝夕は蒸気仕掛にて灘に行きて
四方四角の箱のごとく泥を吹いてあり　是中に入れて
蒸気の火を焚きて其時ここより是を仕掛を為す事
にふして実に感じとりあけてあるも　旅館内にても
見物群集し日本人の廊下にあるを待ちて大勢
群り来りて手を握りて礼をなす是非にあらず我
郎人の手を取りし日本人の手を握りて八大勢是も
罷より手を出して大勢に出る様をなせといふ
もとより何も分らぬ事を通辯に往来不自由にして
甚難渋なり　されど旅館の中には探りに入るを為得

行きても後人の家内或ハ近郷より手傳せんとて来るなり
此旅館をフホーテンステリート(町名)イニワシントン(府名)ニウヒルツ、ホテル(屋号)。
フエヅペド子ツキブラ(主名)ことと云庄家の者懸合して八百
余名何れも其名毎に記の向ひ有車を時宜
兩をも記しく亦下に至し下の欄に出るを見て喉し
銀に来れ又下より高楼まての階子を數十八とかぞふ
さきハ上まて至りしも階子の數百七十あまりと云あて
婦人なとハ宿主来りて手をとりてあんなひして案内し給ふ
にまかせてくりかへし行に八階の上にいたり此銀より四方を眺
るに市中より遠近の遠き迄一と目に見え遠し誠に
絶景なりし下より此銀まての高さ十七八丈にも及ぶなる相
山ハ白き小石を敷けし庭ニ至り段の延今年生なる

行つき三年にして家根を飛ふなり当國に於て
大統領をいふも此ハ其事督宰相以下三五人の言により
その人の撰を扱ふによりてきることとすの大統領の位
年書きハ國人車輿宰相を経ふを言る人を辞
されハ国人宰相を初三五人の言をもとの大統領
の隠居しきるところを札にして其名の名をさ若
と云ふ又一旅を営主人を除の外萬民に付けても
その札をと云者人の云用にてハ其職をとる
感ある處なりとこふ人とも門にさしてハ旅人と集る
筆なく或ハ商賣し或ハ農稼をなし大統領をきめ
年殺のものハ獨立にして一僕を従へたる旅をなさる
又市人も私まて事なし刺を取すまなし人宗

に金ハ大統領と云ふ冠を被りて〇人之又国人ハ皆の
為にする事を知らす　王の為にする事を云ふ〔ハ〕国に
税ありて日本に賦なし　市中にハ金銀あり　国中の
税を集める国王より以下の役屋とりての国土ハ
其十年に六百ドルをとると云ふ　又一日に弐ドルとも云ふ　未詳
当国のれハ冠りを被きたるを出のれとも出ぬ
五十日を限り一度より十一ありしを入魂とも云ふ　又女子ハ
口を明けを入魂と云ふ一とも我ハ人の手を取りて手の
甲を少しむると第二のれとも我ハ我手を我口に当
又人の口にさしてとも人の口を我口にあ
つる時ハ分りにくし　扨て板に文の所ハ硝鏡の中にハ
ガスラこプ（燈火）にて白き所の如くし　右のガスラこプと云ハ我国
にて揚げ行燈の如に用ゆる也　何處も金銀箔にて
多く飾りて市中にハ種々の品物の見世もありて燈籠の
如く市中に燈籠を掲げおきし　街を往き市中に燈火
三百ハ弐ハ七八間ありて又此燈ハ街々ハメッスと云ふ我国
の手附木の如にして　又是ハあふによりて火にあつる
ありて之を以て右のガスラこプにハうざるに中より火を出て
燈にとりて是ハ石炭の気にして固く油燈より其の
を用ひ日本にありて是を石炭の気を築き其所の口に為
空中にありて之も火の家の盛衰ハ捨止ありて是を以て加減
をなすと之

同廿七日　晴　酉

一　今日も朝より御用の内ハ又兩替所にて午の刻過迄

此の宅にて此女ハ茶をうる事也此港ハ至て賑ふ事にて中刻此旅館
ゑ人々の多り是も何事ぞ事に寄てハ同人連中往来
之東都の旅館の折ふし至て中なる所にて異人連中往来
をもちて男女を従て出行し女の猶ある事少
まく之女とても此辺の者にあらず是と同道に
出行とも婚姻とも云ふ事ハ男ハ十一歳女ハ十八歳
されハ婚姻を結ふ事し其後婦も又何郎是同様之
立てより後ハ婚姻ハ其上ハ自ら家業を治めたまへし
且諸事力を合て国中の制度定数人
の法を取て我等も如此是と看探に運輸
何事も守りて同じ所に至リエイと云十五年の童
子来りて語らふ来りてサンフランシスコに抑留して
同方十六歳の水夫と云者
来りて感心して此者ハ如何なる力ある事
をも推察して帰りて見るに是を語る又
手紙を以て帰して同年齢の者ハ数々
是ふしてた婦女をして思ひの外に眼を持つ
識も高り是も思ひし心文をた為ありし年の
婦人の身と身を知るに何ぞ年上之
婦人ハ何と来て年々は十六歳
年を経て此感を知り是を以て聞く事の都合
推察なるを思ひしとも思ひを話し探し
よって文是を推察を経てにありて語ら
之子の人ハ旅館に抑留て踊らせ隠し是ダニスと云

音曲ハベヤナと云是ニて指子ニ合せ踊ル是をベヤナと云是
我国の琴の音ニ能似たるものにて其のことちハ四角ニ
して丸く大仕立の様也 踊ル者ハ男壱人女壱人
従ニて互ニ手を取又ハ左右ニ分れて是指子ニ合せて
手を動かし足を動かすなり 我等見るを見て居ても是迄踊ル
手ニて又ニ西の名ハ何とも是と云承る事無く是能(?)斯様
あるかと見えて有り

同廿八日 晴 戌

一 今日も朝より兎角雑(?)等ニ付午の刻 王城ニ出勤ニ付
都て此度(?)途中ハ御同ニ而事之此儀案内ニて往
と存ニ人 使節人 随行之人と 而て 旅館前より
道のまゝ両側ニ数多の 兵卒ゲベルを持 洞練ニて往

通り道(?)ハ奏楽之候(?)是候して出る楽人ハ十人計 音楽
を奏して通して又 騎馬ニて 面と持 兵卒ゲベルを指
揮ス是等之人 数多(?)数凡千人計之此時前ニ宮殿
讀(?)を往き行く 此邊を過ぎ あて王城ニ到り見る所外
ハ諸の石垣ニ以壊とし 櫓(?)壁又ハ堀の数ハ更ニ多く
一ツの大門を 此所ニて 下車之 カピテーン 此手を見て案内
を云ふハ何事も目的之 我等ハ玄関の側ニ相添ひて
之を所ニ居て何事も花毛氈を敷 正面ニハ種々の草
花飾を我等の相添より二十間斗 隔て廊下の向
ふ宮殿の大戸を廊下の様ニ而て あるを中ニ有 宮殿ハ
其の扉ハ大ニ手厚して 大なり 美ニて 大紙(?)の中ニ有
此對龍の花ハ此扉をまとふ 宮殿の中ニ一間ニある

然るにても不由前に勝れたる者を国中入札にて大統
領をプレシデントと云名をブカナン年齢七十余人妻無之
四十五年の言語明らかに事務掌握をもしくは大統領
のうちには男子妻の方には婦人無羽方合して三千
人余列をなして並居たり何れも悠然たる者にて常に
衆を集め事多く言ひ上ケ難き事あり此対談にて
大統領我等の相対の席を通りて返り出て挨拶
対談の席も相対より能く々々見知り王城中には
更に警固もなく陸軍兵卒の事も王城といへとも
要害もなく只兵庫なとの事国中別に武器係通
ともに相見え無之如し奉の別に評定役の宅
に此返翰之所も御の為事なり事務掌握せしめたりー

金銀方セケレタリー 海軍方セケレタリー 書翰方
殊役目国事務セケレタリー 總制右尾亜ミニストル右外に
は其他中各佛蘭西ミニストル阿蘭陀ミニストル宅へ
此通りの大名の八分目にて此役銘々別我等用事有
る節は出事に其人来て我名札を持参の上にて
其是非を承りて帰りける由大皆何れも兼
而承知にて其事を為し混乱の事を全く除き
如く混合にて殊にも取扱ふにも我主人有々盛んに実
は別かる様にして其理に至り様をも示して諸事の
同前なる事に候

一 其国は前日に申し日に一日国の料理を人食ひ試みに至る
事を為し種々の珍らしき料理に云ふ牛豕鶏等を煮揚

又ハ湯壺の類ニて焙籠なし有て ボウトルの香ひ
似たる食し候ニ付又是をとりよせて食し候
ここの者も於ひ他煙燈酔 此類の類ハ仮なの如く
審しき事の則 魯西亜 ここストル 英吉利 ここストル
宅に此類ニ音 西亜 ここストル 宅ニ有て 酒菜んちやを
あしらひしに 無益にて 英吉利 ここストル ハ当宅之
今日大統領の子有此宅ニて 此節付何もし
それカビテーことよりの迎ニて 本日子息ら居風機書
栅硯箱の類ないとまて 是にて膳をとひ是を寄し
とり急成り刻至り 事務掌宅に此方酒菜
とあし 又 役人の若女ともつれて 踊りを
まじ出無事にて 恵とあせり

晦日　暑中朝より曇り子

一 当地ハ日本人の気候にも宜しくして 去より
の役人旅宿の周り 又当年ハ亡くなりし人 もも廊下
の角様ハ以の外に高きを以 其方の療治之医師
初人何事も日夜来りて世話致し 頭痛之中掃除ハ
毎朝女召人ニて来て 以ての外年の中則旅館より
差下を隔て あやしき事の実焼きを こちらへして出
諸人宜しと集まり候得は 何事に 諸仕水隣子の類
を積て乗り是を 清器に 又 水をとらるにハ ポンプを
用ゐ候ふ 事にも自由成り あまたを急ぎに成りて
又ニ器なく 取扱なく 其のとし 是まで
家作ハ尾不にて 奇麗なる事斬新ニて 張置

半分ハ周て御勤むるゆへ又自然と成しこら候ハ
家統道自ら之給ふ事ありハ其外ハ通て半を勤
一ふらあきとも大家ニてハ死人ありしと云日別ハ
其人跡絶而之数を持来て日本人ふ入せむ
中の別ニ生埋ニ而あるを只音楽を奏しこと也

四月朔日　晴

一　今日ハ又六日暇ふ付市中何方も戸をメ
商賣を休年ハ行て法法之数を礎前ニ立あり
國中惣て天之数を給し寺ハ何らふあて男
女とも群集し説法聴聞ふ休ふ寺ハ楽を奏し
頌文を唱ふ中堂の佛前ハ四方ニ緋之男壹執
小て燈籠に而もあるか為に尤ふも於手行とうち

又唐の約ふ実ニ而ニ而此國半生ハ猿の如しと言
事と被思ニ日曜ゟ毎日の者日ハ遊を翫ひ居あり
年の割ニより市中於而ふあるあきとも到る處ニ
ふして只往来繕役ハ小人同付役ニて五人も
七八人附添ゐあり旅館をあも此年ふして二代
の様ふあるを知ふ唐ニ主庭ゐつく中ふ
目大統領の主ニ従ひ而多くニて何をと乗馬ハ家の者
是を行まするる知るゝ大き人の女子ニも此年ニ高も
大ふ似して大分ゟ何きも調ニて徳ニ而ハ白きを
まて我ゟ半も積上ゟこそふ而兵乗の衣様を
こそとのふて壇を誇びこそ我ハ諸人の於異知のと
者と見より近了余ふして文太日積之知る是ニ

冥想華盛頓の志操なき能蒸気の器を造らしめハ
丁亦して小なる者無からしめ同しく鉄艦
をなさしむ此中所に居するあり又其船の体裁ハ
何れも此船に異なる体なし四方の眺望山河の風景
寛に見るあり氷の上を渡るにも船を出して東の方に到りて
いるに鉄の如き鉄を以て寝所の中にて旅館の中に居る如くなり
此所ハ至て広く広大なる屋根あり陸中ハ車中にして下ハ
板敷なり入口の上に額に常にある外の健全をなして
其人々を勧めたれ十余人の其業の者を発着て
ある道具は仕立て文明の有る者あり又下の屋根には
小八畳敷の西洋の曲芸をなし日本人の大骨折に勝
至しのを写真なし以写して種々の事を記し

日本人の志操をもって何事も為し遂げんと云ふ
我国の為に付けても写真を仕立て働きある国
てなすべきもの事と云ふ能

同二日　晴寒

一　巳の刻頃より他行し十余丁ほど行きて大なる家に
いたる此所ハ我国の医学館の如きにて政府より公園
の広き鋳造場の如き所にて器械を以て工の器械
其農業の道具を販売いたし是迄此所に来つる文
家内の此方ハ其の数を知らず文婦人懐妊して十月
の間其日毎に様子をさしで書き留め置くる
を積み子の数に入るべき事を略して実に
目を経るに於て殺すのなきハ遂げるなり

よしもなく此節ハ四方とも人家ニして尤あかり柱ハ
所々ニ有之とも何れも白石ニ而作りし柱之并
の刻頃館ニ戻り六半時頃より微雨風吹起り
天気も悪く成りてしはし稲光なとありしか遠雷轟
暁前ニ至りて晴

月三日　卯

一巳ノ中刻比旅館書記ハ王城所ニ至ル当年の中
刻頃館ニ来ル中刻より阿蘭陀ニコストル宅ニ至る
并て其婦人を伴ひ其の家ニ至る遅くして又同
家事家族の者共を迎へ料理を調へ并ひ
菓子なとを出しえ文なとともてなし種々の菓子を
訪義ハ紙の数ニ而作りたる文字なりとを以知

菓子の上ニ色々あるものを盛りて山の如くなし
積上けたる我国并和蘭の籠をも運ひ其菓子等
作りなり中ノ中刻比旅館ニ帰り其の姉妹人ニ英利
の年齢なとを問ふて此節ハ宿ニ寄て英人ニ
堅固ニ知りて其人の英婦と云ものハ英人ニ
ても毛國中の華麗なる婦人の人ニよりて取ニ
云婦妹とも小支を云拵宮ニ英國の女王ニ侍
ても宮婦なり名をしエこと云此国ニてハ皆婦
人を尊敬しまつ一座ニ婦人ある時ハ婦人ニ礼を
なして後男ニ礼をなす又婦人ニ対して礼をな
さハ冠をとる男ニ礼をなすニハ冠をとらす是常
なり途中往来ニ而向ふ婦人の来る時ハ男

道を隔てて是を通すを悪て婦人の衣服を抱く我
国にて釈を薄めるとし　又口を唇に手を握れハ
親子兄弟より従弟まてハ口を吸ひ親類朋友ハ手を
握りてこれハ足の指より手を握る事なり

日沢の時辰

一　是物ハ白き物　黒人ハ人賤しむ事にして黒きなり
白人と違ふ事あり　富むもの黒くなし　是ハ白人の奴
婢となり　我邦人の振舞ハ更に浄壹の役法の賞
草んとせる者ハ否のるよりて　悪くて白人の衣又
鳩ハ只黒人ハ人の手を握りて衣として振舞にあのて
太鼓を鳴らして是をダンスと云　又我国の薬品踊
子の類をダンチングルーと云ひダンチングルーと云九　三

百人手を引つれ男女ともに左右より丸く並ひ
立て踊り何事も勝手にして只是を度々に回
の様の類を前の方へ巻き　髪の如く布を以
包み置なり　勝負ハ同し事　白紙の類出て形手捧
立て申ハ鍔に提灯等のよふなるものを踊りに
壱人ツにて花笠をかむりて只ハ竹の類を持ちて又
訓人にて男女手を取り踊りも何も只手人罷
にて何事も手を取り踊りも是梅子手さし
前の踊りを座敷の事にて手を取りて是を踊る
らして是を取りて付も男ハ衣の様なり帰
人ハ乱て乳を出し垂れ小間に乳を出して
生ても衣類の中に小間の類を入て乳を出せ

少しも人ゆるかせる事なし

同五日　晴　巳

一 此日ハ中剋より府縄宅所に出立して巳の剋ニ事務
宮本宅に出立の剋ニビヤールトに出立の時ニビ
ヤールトと云ハ舎張洞族の如く板茣蓙の仕かけにて絶
ことなり　宮用の道を製造する所之種々なる工の
仕かけなり　少しも人力をかりず　是等ハ皆機にて運
うこし　我邦人深く感服せり　上下のものとも見て大いに驚
らるゝ程にて入魂せんとはかりても　銀年[illegible]にて
揺りかへをのかされハ我邦人の前中を驚かせる
と待てあるひハこと[illegible]に[illegible]をとりて見物
をせし我ハそ[illegible]の人を集めて入魂せしむ道を

此時見学数十人ニて満たる男女ともに来て手
を打ち見物しきたり　此時ようすハ我国にも夫人の
手を振り道る事ハ無之にて皆一人一義を
来てたゝ思ふしとの事にて一度見せてくれし
ことの外無ひ来申候事なし

同六日　晴午

一 中の剋より主人宅にて出立して服を着して料理ハ
菓子を出されり　此国の婦人の衣服ハ[illegible]を飾りて
文字書の器なし　婦人とても当時手と尓
おもしろき中より[illegible]の婦人の[illegible]ハ夫人の身
のこさり何事も千ドルより万ドル位ニて[illegible]
会人ハ書を持ち[illegible]文字我の[illegible]を持参

百あるハ此上の金ごと敷くとも尚此家を作り上げる事能
是程迄とも成るまじくて又此家を作り国势の盛
ある此国の人併乎宏大尊心にして西洋伝承にして
他邦の人をもつてハ郷とり行うところ也りし文
一つよりの事も信実を重し己を省とも云々
之様子我郡ら山野に生しし人の来る様よとかくさ
ることのことし キロミや 人も又りかり並人に
面々所作の人併乎をりしき見中ちとも在其
人を行事を生 或ハ備り学礼なるの 日本人の
此国に来るとも如何も有に 当国にあるの人も至情
言と在意ありし文風俗事柄に華人我郡人の事
を推へし皆也に並人ある事にてそうらゆる

法郎の画をおもり

同七日 晴来

一 千の朝ゟより担家に出中中を一見し旅館より
西の方へ案内して其の国の寺院より云々出って来り
此外挿内広くして永作も又大あり西洋の二階ハ
由堂の事にて祝法堂を広しや至て広して中
莫か高座なり四方には人一生の苦楽を種々画き
ところあくの額をとをて又方にハ数多の腰をかけり
高座の傍に婦人の書机ありて種ゟ備し会衆を
向きてんとん此作りて大さ当然の人よりも大きなり
講の折ゟハ世界の蕩文様子にて丸くに読みて此
読の際に身をのべ時ハこの人の前にて人四方

信ずるもあらしと云へる者あるにいふて也此所は金銀網
法とおほせ張國より来りたるへの説を集めし給之
事より一時に出たり此紙は常に書しさる道学
館にて静めて益にあへるより度を出し又出版
ことなと云のし日本の所は諸長門海の辺よと
し其所藤にて種様の家より男女とも小手人の後
様有識にて外其緩より小道も説目只説農業
のみ見るに於て行より各國山海の名鋤何もる
農家なる事に其手猿の大家なるを知るべき人々事に
於ての文明の種説中七両金を集て陰路多
出て業出義せうし未の刻頃より大雨に成り
稲花なし見る大雷風雨種別之文晴夜になり

して家内所にて経史を用ひ説明にして高覧止

同八日 薄曇

一 今日開帳相済候に付市中益多く繁昌国の
通用金銀六金銭銀銭銅銭等にして又各國の銭
等分しめる日唐海は其外筆のならふに治定まで

同九日 晴雨

一 辰の中刻頃より市中捨売少ある見る所小銭をさし
縁をうつさしむ此時見るべきの六人連あるに云ハ
髪時に見えて見し知る所が其の曲取に腰をさし
頭より足までさし記して少しも動かざる左様数
又目脇もさる筆し左様をして少しても動かざる時は
其形ちのさし中の者した後は他角分る銀の中に

三年ニ作りたるものにて又写し光るハ眼鏡
手紙等なり 極て写し其儘に細に記して
有る中の水菓子にて 瓜の如き此にて食ふ事あり
凌雲閣より三十銭 中ドルより十ドル位にて 其中の刻
又文庫にて一覧あり 其の刻 王輪鏡の節 西方ニ参り
行く中緑を見て人形をあつめ文大なる所にて
フワヤしと云ふ見世物の事にて帰宅
十日 晴 戊
一 申ノ中刻ミニストル宅ニ行き ダニチニグルー二百年 總テ藝者ヲ云
行かれ 踊りを見 酒菓子など出し 名々見物して
此国の歌舞など聞き 百人集りて 踊りを見
其夜 兵隊の者又芝居に行 喧嘩 車輪を見物す
十一日 晴 亥
一 蒸気館の中に舞台あり 広き所にて此国の男女
混して三百人斗 行つまり大酒宴を催し 踊り
をなし 菓子果物をとりまぜ 此菓子代の價七ドル
より六七ドルにて 文様なりし人にて 我国の弦
の如き笛を持て 音を発して中華の如く日々夜の
太鼓などをならし 舞を見物して立
寂人ども有て 酒を呑み 此国の風俗にて三百人
此酒宴を催すを云 是日本人の皆感を発し
ところなり
十二日 晴 子
一 兄弟の日に 前日の午の中刻 帰宅より夕方を過し

當西國ハいつて地震ハ少々して無難ニ来
未々大地震ハ覚へまし　西地ニいふてハ少し地震
あつと云ても是ハ稍より動の衰をうけるハなし是を
東ニて噴火山ありしよつて火ハ噴き盛んにして東
ニありなハ地震なしと云　毎ニ自然ニ如此のこと
歸せすしてむかしより凡此説を得し　詮ひ文章とおもう

同十三日日曜　晴

一　朝より夕方いつてなまて日ニ小手供ニ大路縦鋭の窓
下ニ来り日本人の倉議書ハ紙の枝ニいつて置て
好んて各家も取りそえんとてえうさ記事ニ云
猶ニ絶しより華山のいさき為を建しとの事
の國林ニ云ハ外國より来りて小家我ハ家作の破
損してる経ニかたを云ふ所なるもの國の船房之
よつて禁ニ定めたる定なんと付書店の教ハ更ニあひ所
達も西二階作りより八九階まてかしてた上ハ
下より十四五間前ハ十八九間まていつて往来の道もたえ是
ニ服して居りしたるの事なり　文我國のこと居経
居の始に酪旅籠や茶店を経りて経の古あり
食料を得ニ何ま家旅籠やより禁あし　價を定め
あしらふもの八云ニ居るハ是をと云ふものもあれとも其
世話をと出るニ下賤の食事所にゆて是を食す
あり一日ニ價九人其トルより弐ドル半まてにいる別
此外ハ水経のことのたて　食もの八種々
夜ニいつて二度菜を是にて食するニハ

事ところ〳〵二度の食事の時ニハ酒菓子を用ゆ
なるに入菓子と云時には八ニ平之 下女ら留守等の人食
料其外ニハ二ッ牛肉の塩漬なり夜五の刻頃出
せる事初めて誠也

同十四日 晴 寒

一 辰の中刻ヨリ市中ニ於て散歩ニ出る 此所の時ハ繁昌
仍つてなと聞れし所ニ於て此所近く日本人死
去りし所ハ墓内なりとて当人の勝除ニ之午の刻ニ
より帰国の屋敷を集ると聞ニ 仍て当所此所ニて温
菓子を出し夜ニ入ては雑事ニ出かけて見る人ベヤナ
などと云ふ茶菓子を発しうちに入る群集して
見るベヤナの進入なりとも去ましても当所人ハ更て

西洋のしきたりベヤナしと云ハ所々ニ於て茶菓子を発して悉く之
子の刻臥ニ就けり

同十五日 晨曇後雨 卯

一 辰の刻ヨリ此所諸処を見物 此所は佐藤某及諸役所此国
の婦人ハ無事なる事に往来に婦人の見物しに来られ
たりけり婦人のみならず男も来て馬に騎りとゞまりて
見物せられ事なりて此所の道中に於てなる事
など見物すること我等人の見物して我等人ある
婦人の事なるに我等人も又ありしなら珍しき事ハ婦女も多く
見物して婦人も又多しなど珍しハ婦女なく
あつて此国の婦女等しく何事も陰妻をなす
ように聞て来るなり 然我等ハ妻子に申るこそ

こゝかしこと別つ連綿總るなかりし

同十六日 曇夜

一 巳の刻より旅館にて写しの絵の縁を写し
とる見国の市中にて大絵図より取りて見るを写し
来る中刻頃に帰りて別に（[illegible]）氷結（[illegible]）
の絵を見て旅宿へ帰る 山
水名国の湊の図人物 回海船の事 富
稲なきの絵図にて[illegible]

同十七日 晴 巳

一 午の刻 玉塔より眺望の絵を写し 市中見物
[illegible]文 眺望の写し 画を大絵図見物
来る見物人 [illegible] 同道にて旅宿へ帰る

こゝかしこ見る人[illegible]見物事 を[illegible]

同十八日 晴 午

一 滞留中 旅館のまかなひ 酒菓肴
菓子鶏卵 豚牛 猪豚の汁 九年母 の実
絵て国の[illegible] 旅館
我等人々 食文食の上へ[illegible]
胡椒等とも 毎日料理[illegible]
[illegible] 無花果[illegible]

同十九日 晴 未

一 唐人 眺望[illegible]
[illegible] 眺望を見る[illegible]
その[illegible]情の[illegible] 実に感心

ちりてもつもれバ 元の華盛頓の家作よりも美

人口六万と云

同廿九日晴

一 今日華盛頓を辞し ボルトモール 地名 に向ふ 四ツ時前

四ツ前より蒸気車に乗し 廿丁計にして蒸気車

をのりかへ 此所より此内 蒸気車にて是より

此蒸気車をバナナてと云所より出し 大にして

つくる事にて四十人程を入る車を繋ぎたる由

車 又パナナて 手鉄を以 車を引 羽織

せしも速なること 四郎に至り 是よりも

林木 民屋 此彼に見へ 野は草志

しげりて青々とし 或は畑を作りて車を走らして

分明ならざりしとも 華美をなし 楼をたて人多く 其

外松杉様の木も植付候て 車にてしらこトボルトモールに

着く 是より五里の 亜の三十六里ばかり 是より蒸

気車をおりんとおりの者 二度と斯く 此所に我

々人の迎として 車を幾つも 来て蒸気車に

移し 漸として 車にて市中の入口より旅宿

迄のことし 車のむかへに至り 兵卒 ゲベルを

持て 警衛 騎馬武士 凡五十騎計 楽隊と引

路の左右 八隊 此所何れも 兵士を従へて

両してまた 発し 或は 鉄砲 ...

併 其の 或は 大絶 ... 其の 国旗

広 ... 文 男は ... 女は手織を

始りて役をうけし年より五十六年の二月より楼中ハて五日迄
留りたりし間に年々織を振り我ハ日本の蘭人の日本と
書ことなる蘭を始めて 役をうけ 通事中のもの又ハ大家
の年々より七八年と魏として 山のことし 此等によりて
里中ハして 武器製造所ハ東を止ニ階ハ本より
他ハ高き階上ハ広大ニして 横廿間程三十間余の
百ハ斎清ハ横間なり 又中一と二ツのもの又ハ蔵
ともに一階としたりて 此外に百畳程の座敷を設けたる
の婦女数百人中 英人をも交え 我邦人ハ此外ニ
上に此蔵場ありて 無年 弐百人余ケべしとおもひて
調練をせしむ 又二三年よりして 此等事申刻
ニいたりて 蘭館ハ是より 此所は蘭館の役所なり

唐人屋敷ハ日本の丸の内に蘭館を建て又蘭館の三階楼下
ニ而我邦人ハ 紅毛として 紅毛人と来
あり彼の階の内に入て 一と紅毛ハ二三十人余の
東の方へ出て 北の方へ 出入 ボニツを以て
ニ三十六人余ニ及ふ 八九人 此等ハ紙の数
ありて 其紀元の年の一 此紀の紙に
あるの大なるハ 五百人の 人ハ同宿して四百
ハ近 ... 我国 ... 年々 ...
ニ一ツ 大路混して近 ...
又ハ ... 十二三月ハ ...
此様子 当時ニ ... 無年 五百余人

平手洞藻とかいふ字にて記すに文、凡其此処にありて
花やかに見ゆる早き乗りをするとも我国に於ては見ざれ
青き菖ハりを染ありて文作るとありけるにては種々
の事見極め字我ハ英利国の流言を聞きて作るを
大小してありて西の方に此檣文字日本人の名を
かきしるしてある旅館の前にありて広場ありて
檣あり其中に金塗ありて中程ありに白き石をもて
人形を作りたると同しく白石にてこしらへ檣上にし
上に立たるを見るに又白石にて作りたる龍を並ふる見
ゆる其前にハ此ハワシントンといひて英国と我等に
及ひし時此地を定めて此人を建しと云ふ文旅
館の門外に市人来り見て英国人に於て恐るゝ

此市中を帰り候ふ英利国の国中を行くに
力量のあることを検して此地人口三十万と云

同廿日　快晴

一　巳の刻ボルトモー旅館を出立し一番車を起こせて急
ぎ東の方に出て此地市中の大河にそひて北の方の
新しき建物あり見て同刻過ぎに帰り来車より皆見を
さしてきた此の輪車ハ至りし所々にかかして四時
人の多く居る此中にハ四方に紅白の幕を張
中に文字を記したる幕を張りて蒸気車の庭を見れバ
前方に路ありて遠く中に郎党人家ありて
野を林ありて縁とかし車地を早く凡十里半
ゆきて一つの大河あり　河名　ポコボウトウスリツキと云橋の

長さ三百里河幅亜の二里又ハ三里ともいへり又所
半程里にして午の刻ヘヒリテクリスと云所に着 地名
此所ハ大河有り名をハーフルデガラスと云 此河ハ至て
廣大にして 橋を渡る事能はす 依て蒸気車
ともに蒸気船に乗る 是ハ第一番の大船を
建て待ちて又此船ハ車にして往復の為め大橋車
とも並ぶなんの鉄道にて車とともに河を渡る也なり
為まの為し此ハ機械をもって陸より船に渡して
の仕掛に施して陸と船とを平等にして船の長さ
九十六丈八尺 横十丈余 船には角あり 船の両岸
ある所の文の機械を以て上下に待ちて毎の岸に着
さる所ち機械を以し車にして船中より出る

蒸気車に乗りて又行事十里斗にして大邑
有り名をウエミニグルニと云人家ハ凡三百軒斗も有
此縫ものありハフルデカラスより此ウエミニグルニまでの間
松林あるのみ 申の刻に着夜泊る又午
の刻に乗りて車中にて午飯を喫
牛蹄 パニサニパニヤ 等あり 此地よりフェルドルヒヤまで亜 地名
米利加の午刻 フェルドルヒヤ 又ポルトモーより是迄
九十九里余り 市中の入口より十丁斗にして蒸気車
場に至る此所より車を下り旅館の名ゲベルと
称する三千人宿 居る 自分を招くの手と
別れ而して国の...装束...
居る又途中車の...市中...

人群集する所にて是等にて力量の勝負をし
てのち又見物人ハ寸志の銭を与ふ之を貰ひ
こゝに英国人数の中に四五人并伯の下ハ鍵
日本朋友の事なと知りたると見え是等更に敷人の
書付を乞ひ市中の人ハ旅館まて乃至
毎日見物に来る我ハ大日本と書し英吉利語の英字
を認めあし又ちすかたにて今日ハ至る人の様より
鹿機をとりて是を中にさげ少なからず出来て
二三階より五六階の窓より日本人の事を振る又
旗なとを見るのハ白き手拭をふり中には帽子を
手に冠をとり是を上下になして振りまわる
四方より日本人の車中ハ見物の者を投け入

こゝに実に我国の名を彼所に輝さむとも是なりしと撰へしも
数多の者は宿の中則旅館にいたり川流に向ひ又は持
語る三百人余程三百人英国にて英吉利語を知りて
出る人ぞ少なからずして夫より英国を始め多くの
事は皆一層を恵みて知りたる云旅館の家作ハ華麗
之れの者の知る所也又此家作は新築にして実に
知るに目を驚かせり

月廿二日　晴　戌

一　市中の往来は大石を敷き中に二筋車の道を作り
当所ハ英吉利の国中第一にて是ハ婦女子も
いかなる馬車にても自由に往来を知る文
我ら出るの話にかゝりまて此湯殿にて

もも一ヶ所毎にあるなり 入湯に行て捨地となせ
る時は湯あるも自由なり故に勘定もし湯屋
亭主に拂ふなり 是は猶毛氈を敷き除けて
トこの所にありその席は終宿所をコニテ子コトホテルズ
テウエニツ。チヤーストノツトと云ふ 此内 息居家数凡
百余あり此地は小にして人の数少なく富家
なる家の外は 又無用の硝子細工のよふな物と云

同十三日 晴 寅

一 卯の刻に出立して 出京数多の者 道は横手を見て
日本人の旅籠と附る 又 前に云ふごとく其外一つの出所
此地の事なる処は日本人の旅籠利用の旅籠を建て
湯治に行きあり 又 其の為に車中にも旅籠を建るの

頭にいたりて旅籠を借附るなり 館の従車には金を
払ふ〇馬車に乗るなり水桶を乗せて又桶に入れて
勢多の家ありて是を引跡に面塔のをとし続
工事又あり〇華盛頓より此邑に来りて 小四〇〇置に
至り又担車に乗ることも小さき汽車に乗せて毘
なるの女〇是を引きて 小四〇を行けるなり 未の刻
此處の此所は平山にして 又 屋々前に大河の流有
行き四方をながめし 永く景色の地なし我
国先の山の景色をみて此処も知れて湯菓子パこの
數を出し又松の木も多く出るより市中水
道の源にある此所は汽車の往来をして山と云
多く行き市中は人家をとる そこら迄

宮の機器製造所ハいつれ中の中朝成館大西京
の地ニて此旅館より三里余もあり左れとも同車夫後く
して暫時ニいたる迄中ありたり

同十四日　晴天

一　旅館前ノ西洋菓子屋中ニ三人連の婦人来る其
者年ニして文字を知らさる由日本人筆紙墨
ハ無キて是を乞ふ者ニて筆を出して礼を為して
婦人も又筆を出して礼を以て礼を為して
去り難き時ニして再ひ来り何事か告ケて菓子を
持来て是を其国の言語にて記して日本人へ送り此
花何用の品ぞ問ひて云へ其價を尋しニ是一ドルと云
日本人是を求めしに其後の婦人へも先に送りたるとひ

云様日本人の名札を西洋ニて是非ニ名札
を其三人ニ遣ハしませ候ニ者往きて我
邦人市中往来の旅亭迄ニて日本人ニ逢ハ
毎ニ握りをなしたるものハ何れの方にても是
を取ると云本国の人を送り来りて大ニ悦
色し西人の若者なり早まと迄ニ相手の
為ニいたしては我国の報ニて持参の筆紙
しよう迄にも仕方ニして花を与へ乍ら悦し
答る様にて云不為ハ先しよ写真の幕ニして
まづ写真来りて婦人へと相贈りと云し此一枚ニ
しの相手行り云様写真ニ仕より持ち来此是を
御写ニ写真を戸棚ニしうくし文字を書し婦人

のふ為行う文立しこその目をもみひく寝まぐと戸
棚よりおしゆきんとしたるに節会行しぬ婦人出て
御尻に糠ぐちにつけこれをもつしく化粧とすこと
ことも立そくる事を云んめしけや更にあやしき
ことより今事を宮子面白くして各一筋きり扣も云まかく
此ら今ものつしきて陰陽ハたゝ大家の娘ふ別居の
男子なら云子の生れの陰魂を扣うて是と娘の
陰子て見ゆる男の云ちゆのとゝこれとのこゝ行ら自
身の陰ふてうかつき陽と云ち左に此まん陰入
時の陰魂ハ二陽の忘れ陽子を扣けて気の初入の
陰魂のよりかうき陰陽を云先のをせし男別居の男
より生れし陽子を持まゝ四男をうんすゝ嗟哉にして

ことのあるを知りしを忘れけるにはなれて陽子のまをとり持ち
砥ををとりこれをその孔に入れその男文陽子を持て
おきまうしうけしも扣りしこれを陰くをなめてこれを知りてとりて
五子に陽子と将子をと合せうまれたるに大ひにおとろきひく
夫人の男陽子の手を見り上下にいこうて扣うなす夫子夫ふ
さうるをめつらし 同てこれを見かくりまし夫人の男魂
りて見つるをさうしてありた夫子みのことをいふをもつて
ことはあきより一時にをりて羽音のまをと女とも行き
ひふようろこびて口をとめし文種をの根をとおもひて其の孔
羽音とまに男のみりしもたに五十年ひて将子をよりなる
夫人の男わかし力まさりて其男を井の中に投めてく
遂ふれたの婦人は猶も扣子にいとり井の中の死骸を

是は張る所の此居又境る西の路り家は無人
ふして境を日本人ふ縁をある後の内の事ひ等
稽古なし又も絵図の在ふてやくとて大家の
婦人あり手本あの道しるる事 文身の躰ある
は我國の市川ともの漂泊ふも備さしけるこ

同廿五日 晴世

一 旅舘食料の器ハ猪子瀬戸物の外ハ皆銀を以飾
りしハ此銀ふて飾りし器ふして使用可と云
芸國ふてハ皆家の器ハ何さても銀と用ゆと云定
御種しても目方ふて銅ある可く事ハ少くして使
用可きし 尤ての為ふもの小寺の金銀を用ゆ
金ハ是を經日あちの少しとえとも市人ふまれる道

杖のうあるとの筆ふ重とも用ゆるその為し 去る絵の意を
云ふあし事 去るあるは言葉の人ある
一日の中ふ纒をあへ扨は云ある事 ふ容術し云え
日日ふ其扨をあり 如しも 振の法さ ふるを見る
時は扇とする言 苦行を只分をあるは更あり足袋
を其扨を皆をも紀扨をわるしても 術しきとのと以とも
如しも術人ふ見るる事あし 詰居ふの居て中より
謹をあるし 筆事をあちこち以ふ此肉ふても味て
私をとしても文人の詩居は入る事ハ新ふうちとれ
とは中ふて苦をあるして 好 戸を明ずのるあり
又為毎ふ漂めるの 謹ふさ家ふハ何をすふも 桐あてさと
ふ振文振日より ふ用ゆる我國の振さし以ふ 例ある

油番衆等を會所へ召自分宿内の廊下に出る
まへにちかく来る者の讀み上ゆる聲の乱れとゆかし
めずらしき事の有の者の能さ感心せり辰の中刻
金銀の神に詣でる為の鐘の音の打出し
事の次第婦人及我弟子婦人の中に来る婦人は徐々に
扇子手に振るを投合はせ婦人の名札を示し
九年の年来の見ゆる人に参りてまた婦人を呼
呼び出しあまた人より投ずるに来る者の近くに
り是非の是まで人とも投げ婦を突倒し種々争
呼ぶ声ありて銀鐘の霊場の士卒来りて見をと制止
之婦の宅に送り此婦は怠りし来るを投げあへて
有り是まで婦人に向ひ見る人ありて多くの日毎人の

思ひとめ是非年の其の是非を婦人のよき
事を為して又見物の中より日毎人に来るを送りとも
有る人の怠り投げのみの事し日毎人の
是を捨て去るを林に

同其の日 晴天

一 辰ノ中刻金銀に出向より此所に数多金銀を積み
有り其の申上の為の事有りて思ひ事を述べらし
何事も其事に人の為の勘定の事の有る文
不少の宝の用金に積みて金山を為し宝の用
数多に年の割に出る鐘に銀鐘に力婦の年数
三十三年にして形ち他に有りとも其の此婦
残の古き品々を年々に極く富に上下に出

此紙ハ凡水気ある中をのそきて習二三人の力ニ
結り起て此国のものハ手力多くして女も力を
南国ニても日ニ四五度紙をもなし抱て乾すと
見え候ふらの漉ニて紙の連ニて南国の事多く
小細にして年七八才より十八九までの婦人男の子
亜人家ニ事務紙ハ来り女郎人其女ニ漉紙を
行くものなし人にもしかしよりて甚だ不自由なり人
甚だ筆をもちてもあらん憩我国ニては事中務
事ありて一人ハ魚景作るニ筆盛振の就
あり略して其の別段あると

同廿七日 晴

一 午後より市中并ニ紙問屋を見物ニ回る

又世上の紙漉の造り方紙を師何事ニあり及ぶ文
之見をとふに其ふハ十歳より廿二三才までの
婦人集りて手事をなし紙を漉る事を憩ひ
又年頃日々人の仕事をとりて各其あれを
あし又名れを承りて其業のせを務りしを
行きも大紙の様二階に業内に二階ニ附り
紙の紙漉あり此紙にて紙時紙も業子と
あしてたまて其家をまて又まとも帰給と掛
あかた家ニ入りては遠方より日本人の来るとみて
此家の主ハにはにて此方の郎人其をとられをと
あし此家ニ事をともの兵事をく其方を紀
也其此事に其二階に案内して此紙ハ多くの職人

なりて銅判にて種々の絵を摺出して其様を
みなに見せしと云て名前をつけしとなり
彼国にては常に曲馬などもありと云り 此事にて西
洋にて猶更此度ハサンパニヤあり 名前の紙
扇子にかきとられしともしてきて 此者は又亭主より
大切なる絵紙を我等に送ることを殊更申ありて
軽業一人して外国に至る人来りて風船をこしらへて
去る亥年にかへて五六人かこりて むかふより来る
翁人とも乗て空中に昇りしを見る事ありと云ふ
かくて居るにかかる西洋に携をて此事にて風
船をこしらへむ又の我国人風船をこしらへ
て日本人の傍に来り日本人もこれ見物して今

日風船に乗して 子ウヨルク（地名）にいたると云 又風船の形
ハ大なる袋の如き物にて 此袋ハ薄布を塗
たるもので其中に積の桐油紙を以て大さハ
四五間計の丸き袋にして 廻り長さは拾間余の袋
に網の様なるをかけ 其下に籠の如き物をつるし
諸の事をする者乗 廿間計の さるのごとき船に
人を乗る船のやうなるものハ 其利息の旗をたて
ますとて日の丸の旗を建る事あり
若き袋の中に側の中にて 大き旗を揚き
石の油を諸所にて袋の口より風のたてる油ののる
ようにして袋の満つる時ニいたりて揚
かけて上る袋の定りをとききめ船の口

水筒ひはまるらを極し筒の口ハ筒をとらして
池の方へ向けて撑めとなり次第に登られ
其里中ニして東西の方へ云ん之様ハ庭しても
之れ是より子ウヨルクまて凡百里と云亜の中路と
しく達すと云文云風船ニ遊覧を仕立てよう
至て速ニして是より日数まて六晝夜ニ達
すと云絶艶の庭をとれ日本にての則ち昼夜
数年云風船ハ人躰ら云ひしなりて実ニ海の底ニ
細ニいより死ととを云のし同て百ケ村の桝に
て用ひまと是を分れ時ニ用ゆと云此庭ハ我鉄人
ニ見ん之為ニ用ゆと云輪風船の庭あり人の
知る所是緒ひて是をと用ゆるニあるよ人口

の工事の事既ニ拠ると見えをると云又此所ニ
テレカラフとん子ウヨルクら用候を達すると見る是
より子ウヨルクまて凡百里中の処をも直ニ音信を承るの
電光のことく至る様し是常ニ云エレキテルを以て
之仕立なハ千里の外も通し好筆をも手ニ取りあり
又此所ニカスラとプランと之庭の池あり是を續て
前ニ川の方中に往還の道アリ線の人渡し別の
仕立あり又石を組み續き是ハ方中ニ直ニ仕
立あり大庭の池と水中ニ通し悪しき所
ひとつ右の所ハ大庭を続き所ニて之庭
あり又此所より二十丁計ニして之様なる所の
庭ありあり十丁中の庭ニして云の事を

往来の旁に垂簾あり中ニ紅帽を施し是ハ車馬
或ハ諸人の輻輳する場所ニして常ニ男女来りて市街
を繁昌し車馬を往来せし通の婦人来りて之を見
違ふ事無之刻ニ至り始て右の如く成の刻限ニ火
消し出して旅館に帰りて見物せしむと云
数千人程中ニ於て一に ポニプ 仕掛の蒸気車
行く此車ニ見物人を帰る事日本人の衣
類を見んとして群集し其の中に入りて見る事ハ至て
窮屈なり 種々の帰路を尋ね来りて行く事ハ何事も見る
て上下共に驚く也 是我国の風俗の見の如
ある人の事を請ふ人数凡二千人程 其人毎日来りて
数万の見物人を押しわけて 又楽しと云ふ

之の数百人ありて楽みに従ひて其外に見物人凡二千
人斗りにて是を聴く其外に車 在中の如く
此方の船より見て其上に帰る 橋の袂にて是を観
見物人数百 閲の如く 頭上に巻くの
衣服の文 西洋のごとし 其上に黒人の頭に
冠りて衣服ハ黒衣の如く紳士へ行あり 見物を
為す也 此人も行凡二百人斗りも続く 其后笑ふ
して見物人を押しのけて

同廿八日晴辰

一 辰の上刻出立蒸気車ニ乗る凡十丁斗りにて
デラワレと云ふ河ニ至り此所にて河を渡り船に乗
河向ふニ至る 十丁余あり 其より蒸気車に

着岸に先ちて午の刻アニボーエと云所に至れハ其里の
数千の軍兵此所に来て集ひ河岸の両岸に並ぶ其船の
名をエイライイダと云又河の名をネウヨルクプリンセ
スペイと云此船に兵卒数百の陸軍士乗組み本日三日より
十七八歳迄の婦人を男装にして旅装をなし
又数千人の海岸に来て日本人を送る船中に
充満して平服を着し手旗を振り船を見送りて速に帰る
此所を過て此所ハ広大にして海を望む大ふ口と
クアヰラニと云ふスタツノアヰラニを見て此島と言ふ
此所に至て六河嶋の船中の船の眺望広大
にして又嶋々の祝砲を放ちて本国の軍艦共
祝砲を放ちてネウヨルク海岸に至る此所にハ

大砲ハ凡そ十二挺も有て祝砲を放ちて未の刻上陸する事を許され
其外数千の兵卒数千人ゲベル砲を持て隊伍を
立る事の有様ハ中々に言尽しがたく二千の
の様を見て有る程の群集を隔て
筆を以て日本人の見る事を拒み我ハ本人と共に筆を
取る事ハフエルトルトやの新しき時ハ五里
余りして従還の広き所ハ此所を散歩する事を
許されて綱渡りを見る事をなしと云ふ人
各ゲベル七ケ国の旗を持て英利堅より来り
国人数万の者英吉利仏蘭西等よりも諸国を
出会して其数千の数万人の楽人一隊毎に
冠装束等を備へ数千人の楽人一隊毎に奏

出ると屡〻しさんさ遊し かまちや女ま戯をとくちてはとむ
ことのさまさら見苦しう覚ゆ 如しともに西洋の札まさらも無く盛
難かれ後は途しらとくの事 なくて殊に凝せり
又此家の中に婦人三人あり年の頃は六十ばかり
なるは頭は其幾程ともあらで手にはさを持て文を認
人多くありてかかりの薬缶の中より出でむる
二十丁余りにして旅館に至れば此家は華盛頓府に
の大家にして此は七階なりといふ人を四方に廣し
又我らの室毎に日の丸を掲げ羅紗を敷き床
にて飾し又紙縫の画を掛けて其飾りを是れ
ある者に椅子等を付る旅館の中にて最も麗し
家の主は如此大家にて持此家フェルトルとやの

旅館主も此家の主の持なりといへば日本人当所
着したる時市中の者に沢をを体さんとを加ふる
　　同十九日　晴
此地は亜國中の繁昌の地にして前後の隆なる屋
商人馬車ともに往来して絶えず家毎に椅子の高
物なる商は路上に出で並して商人の家の
への口の上に教室ののガスランプを灯して商をたる物の
家に金具を用ひ文家内の様子に椅子除子
つまり室中にもの暑は目をと驚かすの事にして織に
述ぶべし 我等は日本女ともに英国より商の往来
報繁し 当所は他邦より多く渡来し往居と同て
日本人他行には必ず警固護衛あり 是も由縁人

の此國に滞在して居とも如何なる人の周遊するとも

なる國なりと見えし

五月朔日 晴 午

一 午の中刻 当所の御旅宿出立 紐育に向て出立の際

為に出迎として楽人 早人数を差添して

先に立ちて行き 白布を頭に巻き 士人ゲベル砲を持ち 兵卒五百余人

続きて 音楽を奏して 来りて旅館に到着 文

呉 旅館の近辺には兵卒千人余 砲

を携へ 群集して見物人 日本人 異国の

為 此旅館をフロードウェー（町名）メトロポール（主名）

テンと云

同二日 晴 来

一 巳の刻過より 市中を見物として 旅館の内に行き 文

[illegible] 芸者をして 我國より [illegible]

[illegible] 見物人の芸者の [illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible] 種々の [illegible] 婦人 [illegible] 人

[illegible] 婦人を連れ来る

婦人 [illegible] 婦人

の側に [illegible] 種々 [illegible] 婦人 文

叉ふ是を見ゆ頃より此等種々の所為ありて幕を
おろすれども見物の男女とも亦側の酒屋に於て
酒を肴或は菓子を喰ひなどして其の曲を以て来て
見物し芝居の場にては酒菓子を用ゐる見
物人は狂言を見もして日を人の手を遠さと遠さの
は其眼瞼を開けて次の幕には寄席にて
山家にして是人の古書緒のその頭を…して
婦人の跡を追ひて来る是等を連れ来りし婦
人の言ふそのようなる婦人は其の往の所に
と見なし　山の谷合にて来りしに此所にて立去ふ
道にて又ひとつ人にて山道を能く婦人
は是より先又ふまとのように又職に於ては婦人

のみなさる事の頭の上下に在て言ふ散乱して跡
を追ひて来り給ふ男女とも共に連れ添ふ
之女職の頭に参りて男女共に手挑文使吏は
婦人を見せて書を見せて見物の…婦人
吏の芸し…を見るも尊職の…吏の
青芸などもして…狂言にして立ち去
種々の所為ありて是より先道を遊ぶ時は所々に
そら…て返して西白…回て除く

同二日　晴中

一　芝居前より…の芝居を見物に行　是非程
之の所人　群集して…所為は日本人に於
ても…是非…様…の様…にて

夜ニ至り又旅館内異人の芝居を見物ニ行
方の芝居より日本人へ請待ニ付是日本人行く
されハ見物の異人も芝居ニ不見して旅館を見る
来て日本人を見んと来たるとの事ニて芝居ハ見ん
なかなか不用にて有り 当旅館の主人ハ名ハバタイロ
このコロ子ルと云 近ころ五六年前ニ魯西亜国と戦争
勤めし者と此中ニ有名ニて戦争ニ出し諸事
出来ず二千人ほと率ひて魯国の加勢ニ行大砲を
立し人と云

同四日 晴 酉

一 午の中刻より旅館を出立ちて 此所ハ彦兵衛にて
凡十町程行 築山有之庭として 茶屋有泉

ハ八方より流れ来て湖と成り是又広くして 水西瀬
々として風景宜しくして又所々の松楼の
の大木ありて此所の庭を作りし 御用金
弐千百ドルと云 此所ニ而て酒菓子を出しておし
又皆々この帰り人夜ニ入りて帰りたる也

同五日 晴 戌

一 酉の刻過より旅館の二階ニ登りて眼鏡を以て月
星を見る 月ハ地の球ニ似たることの事なり星の文
宵の明星を見るに そろそろ其日月のことくして
又外ニ是の星を見るに種々の形ちある

同六日 晴 亥

一 辰の刻より市中を見物して世界中にて名高き

ちら教中の船へ参り行き候処牛より大分人々角力を
とり或ハ本船ニ而蒸気船等をとらへ候ニ付
異人の芸者をとらへ候

同七日　晴天

一 ところ日曜日ニ付市中異人を休ミ候ニ付市中所々
ニ而種々ニとりつき亜墨利加人数悪しく而大亜墨利加
人数悪中ニ而金銀百トルをもって国ニ而万民とも
大ひニ難渋いたし評判よし

同八日　晴天

一 明日より大工棟梁や其外の職人数多来りて
旅館を造作し又芝居を催し夜中とも之見
物ニ人々多く列ニ而大勢来り見物人

無急の為ニ大勢にてを得て仕度ニして　ダニチンゲ
ルー ニ而会人来るダニチングルーハ英吉利人なるをとりけ
又見物の男女とも多く入来りて大ニ雑集し
而して其所にて酒宴を催し此うち本国の
新ニ造作せし舞台ニ而踊りをなし夜ニ入て家
々芝居をこのぞり数万の旅中ニ有之やうニいた
本望ニ国を離れて中ニ而まて異人とも有之晴天ニ而候
酒宴催し踊りをなして

同九日　晴天

一 ところ異人宿所へ参り牛の料理をいたし牛
酒来せし　ペロリの宅ニ入参りてもペロリハ病死して
人々ハ其代ニ而家中一同愁嘆ニして又日本の

御紋の所り日本にて浦賀の者にも既に見しと云ふ
その立寄りし所にて額を着たる者ありて来
門の役人共も小筒を持せり扇子を多く持して
随身も又二足の草履を履きて頭を垂れ日本人の如く
見えて大いに狼狽し手をつきて膝は上
り扶を笑ひ更に倒れを申すを見て手べロり
ちに浦賀にて我国に知りて草履を出し履
に摘みて居て日本人の如くなりて浦賀よりの
幕府の命にて此所に帰りてハ別れを知りて踊を
志しのまゝに人の如く語りまゝに候て情人官
に至りかね候やうし又大いに恥 我ハ為さ様
実にも便にして我等にはまりて居らぬ申ませ

こゝに此を知りてまゝりしる事に候し 七八十年にして
大方の家にはいまにせよ事にもこゝに此家は薬局にて此所
にハ日本船頭人は阿りて 踊りても申し浦賀子
等を知りて我をみて来の中國にて風船の形を
みる風のこゝに前にまた國で時にもあり此風船ハ子ウ
ヨルクは来りし風船にまたお出でになる時で空を見る時
ハこゝの文に在りしてこれを事 前に其風船は当時
國禁にして操りに為すまゝかと見るまゝに文字のまゝの
などこゝに座するものと云

同十日 晴卯

一 午後より市中を見物に出て其の道にも又人の美人
我等の事をも見まして道にも人の往来の通りハ往返し

案内せしむるに華美なる遊覧所にあらす余等は
ここに於て行しに余は大ひなる手つから
看板を出しける家に連れ行 此門に案内に因て
立ちいてたるに西洋に居ることなれは知らぬ所に於ては
笑ひ合ふを勝手にて文 教育の盛なる行ける所にて
其人は人なり 口と手にて手つからを示し
世話して我國より仕立てたるに 之を術に達し種々
の事をなし行かるに 高尚にして面白し

同十六日 晴

朝より市中を 指南 此英利國に於て政府に於て
國中所々に學校を開き總ての教育を知らしむ
盲聾啞 盲目なる者に教ゆる事あり 盲聾啞を 生等に文
字を教ゆるには各國の言葉を教へて のこともの
形ちを画きここに上の所に其名の文字を書き附けて
是を教ゆるなり 盲目には紙に文字を高く
出して是を以て教ゆるなり 学文を修むる
聾者の用ひ 自身の手指を用ゐて
入用を為すを云ふ文 指にて教ゆるに
をとる 盲者なる者は
病院あり 病中と云ひ 業をも用ゆる事
病院に入 此所は 医師
その義
盲病 十里 横六里にして 人口
凡三百万と云

同十一日 晴 巳

一 巳の刻ニウヨルク旅館を出立 同所より三里程の所に参り
二十五六丁にして海岸にいたり 川蒸気船にて小舟に乗船
此船の名をレエこと云 是も里余にして フレカット軍艦
ナアヤガラといへる此船長三百五十フート 横五十フート
にして蒸気の煙出し一本なり 此煙出しと云ハ潮筒
作りたる所なりとさし渡し 長さ九尺余 此船スクルフに
して又船首の大砲を備ハトモの方と日本人の経
所ハ此所ハ新造船にして 是ハとゞまると云
言ふまでもなく機嫌にして 我等の居室ハ下二重にて
御家納と云ふ所ハ十一人同居にて 食事を
相済早て 煙草をのむ事を許され 船中にいたり

兵卒の調練など船中ハ手際よく 又ポウハタン
の船よりハ略之 此所に往昔あり 當港内にハ船の子
の大船舶 其中に英国の大軍艦名ゲレートエ
ーステルンと云 長六百八十フート 帆柱六本にして蒸
気の煙出し五本あり 是世界第一の大船と
一説に英国の女王日本人此米利堅国に渡来せ
しを此船に来りて見物に来りしと云 来の刻頃より
高官役人此船にて上陸中 饗食料として
日本人の料理にして 味噌汁の類 其外
陸中にて食事をなす 此ニウヨルクの旅館
當中ハ毎日旅宿を見物して又日々旅宿に出入

同十三日 晴 午

47 表紙書入

一
午の刻碇を解き函館を出帆し東方に進
二里余にして左方の陸地に尾鳩ある此所を過て
船中に於て祝炮を発し相図しけれハ尾鳩ニても
祝炮にて来の刻にいたりサニデホック（地名）といふ此所より
水先案内船将より時直ニ縄梯子に乗り大船を
辞して別を告去れ